

## 第3回京都府総合教育会議議事録

- 1 日 時 平成28年3月10日（木）午後2時から3時まで
- 2 場 所 京都府庁1号館3階会議室
- 3 出席者 山田 知事、小田垣 教育長、畑 教育委員（教育長職務代理者）、  
冷泉 教育委員、平塚 教育委員、上原 教育委員、安藤 教育委員
- 4 議事内容

### （1）知事あいさつ

（森下文化スポーツ部長）

ただ今から平成27年度第3回京都府総合教育会議を開催いたします。  
まず始めに、山田知事から一言御挨拶をお願いいたします。

（山田知事）

第3回の総合教育会議をよろしく申し上げます。5月以来議論を行ってきて、大分意見がまとまってきたのではないかなと思っております。そろそろまとめにかからなければならない時期が近付いてきました。本日の会議では、これまでの御意見を踏まえて、集大成としていきたいと思っております。

広島で悲しい事件が起き、もちろん学校側のいろいろな問題があるのだと思いますが、いろいろな問題があっても、やはり子どもたちが生き抜いていく力を育んでいかなければいけないと改めて感じました。そのためにも、子どもたちが安心して学ぶことができる環境をつくっていく。さらに、京都の公教育の大きな役割を果たしている私学とも連携していく。そして文化、スポーツや生涯学習についても、これからの方向性を定めたいと思っております。是非とも積極的な御意見をいただきたいと思っております。どうかよろしくお願い申し上げます。

### （2）京都府教育及び文化等の振興に関する大綱（仮称）について

（森下文化スポーツ部長）

さっそく議事に入らせていただきます。本日は「京都府教育及び文化等の振興に関する大綱」（仮称・素案）を事務局から説明させていただき、御審議を賜りたいと思っております。

また、教育長から昨今の情勢について御報告いただきます。

それでは、始めに事務局から大綱案の御説明を申し上げます。

（中越文教課長）

まず名称は、案文に教育だけではなく、文化、スポーツなども盛り込んでおりますので

「京都府教育及び文化等の振興に関する大綱（仮称）」とさせていただきます。

全体の構成は前文、趣旨、基本方針に分けています。前文は少し長文ですが、大綱を策定する背景や視点、意義などを説明しています。次に、端的な短い文章で趣旨を表現しています。

基本方針は、大きく4つの柱に分けて構成しています。

一つ目の柱は、子どもたちが社会を生き抜くことができるための力を育む。そのための方策として、（1）勤労観・職業観、ライフデザインを考える力、（2）確かな学力、（3）規範意識やコミュニケーション能力などの社会性、（4）グローバル社会に対応する素養、（5）一人ひとりを大切に、行動する力、（6）たくましく健やかな体を育みます。

二つ目の柱は、子どもたちが安心して学ぶことができる環境づくりとして、（1）子どもの貧困への対応、（2）いじめ、少年非行、不登校などへの対応、（3）学校の教育力・組織力の向上、（4）地域と連携した学校づくり、（5）安心・安全な学校づくりを目指します。

三つ目の柱は、京都の公教育に大きな役割を果たしている私学とともに、学びの環境を整え、社会を生き抜く力を付ける教育を進めていくということを謳っています。

四つ目の柱は、文化、スポーツや生涯学習の環境づくりを府民目線で総合的に進めていくために、（1）京都が世界に誇る文化財の保護と活用、（2）京都の伝統文化の継承と新たな文化の創造、（3）スポーツに親しむ環境づくり、（4）学んだ成果を生かせる生涯学習の環境づくりを目指していきます。

（森下文化スポーツ部長）

この件につきまして何か御質問がありましたら、まず出していただければと思います。

（畑委員）

この大綱策定に当たって、知事との協議の最初に、私たち教育委員会の教育振興プランは非常に細かいことを書き込んでいますので、知事から「総花的過ぎて、子どもたちに直接伝わらない」と指摘をいただきました。まだこれでも全体としては長いかなと思いますが、一つひとつを端的に、目的もわかりやすく整理していただいて、本当によくなったと思っております。細かい言葉遣いや表現の微修正をお願いしたいところもあるのですが、府の理想まで盛り込まれていて、私はとてもよかったなと思っております。

（山田知事）

大綱として、もっとメッセージ性のある語尾、もう少しインパクトのある語尾のほうがいいような感じがします。

それから、最初の挨拶でも申し上げましたが、「変化の激しい社会を生き抜くことができるよう、個性や能力を最大限伸ばします」だけでいいのかと、広島的事件を見て感じるわけです。本当にあの子どもは救えなかったのだろうか。なぜあの子は先生に対して「私はやってません」と言えなかったのだろうか。「やってもいないのにこんなことを言われた」と相談して、ピンチを切り抜ける方向へ行けなかったのだろうか。これはやはり今の教育が抱えている一つの問題点ではないかなと思っております。本当に子どもたちが生き

抜くために何をしなければならないのかというところが何か欲しい気がするわけです。「ライフデザインを考える力」や「確かな学力」、「コミュニケーション能力」など、相手が何を求めているかを理解して受け答えができるというだけではなく、人権問題と向き合って自ら考え行動する、「生き抜く力」とは何かというところが欲しいような気がします。

また、2つ目の柱「すべての子どもたちが夢を持ち、安心して学ぶことができる環境」の中の(2)「いじめ、少年非行、不登校などへの対応」で、「学校全体で情報共有するなど組織的に対応」「薬物乱用などの非行行為の防止・根絶へ向けて、専門機関や家庭とも連携しながら」とありますが、ここは学校と専門機関と家庭が連携して、地域全体でもっと取り組んでいくような話になるのではないかなと。(4)の「地域と連携した学校づくり」とつながるような形でもう少し強く打ち出してもいいのではないのでしょうか。中央教育審議会でも地域との連携をかなり前面に出しているし、チーム学校として、学校の中でも先生だけではなくてありとあらゆる人が連携して生き抜く力を育むという方針が出ていたと思うのです。内容的に大筋はいいのですが、もう一步掘り下げたメッセージにしたほうが、インパクトがあるのではないかなと思います。

もう一つ気にしているのは、「文化財」とは何かということです。「京都の文化財の保護」と簡単に言ってしまうけれど、“文化財とはいったい何か”が、実は一番問題なのではないかと感じます。まさに文化財を掘り起こすというか、見抜くというか。みんな「あれは文化財だ」という時の判断基準があるべきではないかと。よく指摘されるように、国宝や重要文化財や府の指定文化財が文化財であることは間違いないと思うのですが、京都の場合、それだけで済まない奥深さがあるので、特にこれは教育委員会の管轄ですから、そういうものがあってもいいのではないかなという感じがします。

私の感想はそんなところですよ。

命を絶つ子があとを絶たないというのは、本当に大きな問題ではないかなと思うのです。

(畑委員)

知事のおっしゃるように、本当にもっと早い段階で、子どもさん本人や家庭の中で疑問があったはずなのですけれども、誰もそれに気が付かなかったのですね。

(山田知事)

子どもも訴えるところがなかったのだろうかというところがありますよね。どうなのですかね。

(小田垣教育長)

一人の子どもが自ら命を絶っていますので、表に出ない背景もいろいろあると思うのですが。知事がおっしゃるように、社会的に自立する上で、我々が現場で一番大事にしているのは、自分自身を律する力、セルフコントロールです。社会的な自立には、自分自身を律する力がやはり要るだろう。「確かな学力」だけではなく、そういう力を集団の中で育てていくのが、学校教育の一つの役割になるのではないかなと思います。部活動なども一つの機会だと思っておりますが。

(山田知事)

(3)の「規範意識やコミュニケーション能力など社会性を育む」の中にそれに近い言葉が入っているような気がするのです。私が心配しているのは、先ほども言いましたように、なぜその場で彼は主張ができなかったのか。それとも主張しても受け入れてもらえなかったのか。経過がわからないので難しいのですが、その時に主張していなかったとすると、なぜ主張しなかったのだろう。主張していたとすると、彼の主張を受け入れてくれる組織が学校ではなかったのか。もう少しいろいろな人と相談をしながら問題の解決に対して進んでいける力があつたらよかったなど。これは状況がわからないので、決めつけることはできませんけれども、何かそのあたりが気になっています。

(上原委員)

1の(3)の「コミュニケーション能力」はいかにも日本的なコミュニケーション能力であって、相手が何を求めているか受けとめてコミュニケーションする能力を磨いていくと。今、多分知事がおっしゃるのは、もう少し自己主張できる能力も必要なのではないかと。

(山田知事)

それを受けとめる組織とは学校でなければいけないのではないかという。

(上原委員)

本人がやっていなかったと主張したのか、していないのか、その辺はわかりませんが、もし主張していなかったとしたら、もう少し自分を表に出す能力も必要なのかなと。

(山田知事)

先生が聞いてくれなかった場合には、きちんとそれを受けとめる組織があるということでしょうね。

(冷泉委員)

基本方針の1は、「変化の激しい社会を生き抜くことができる力を育みます」とするほうがいいですね。個性を伸ばすとか、能力がどうというよりも、「変化の激しい社会を生き抜く力を養います」とか「力をつける」ということですね。

(山田知事)

そういうことだと思いますね。個人主義なのか集団主義なのか、中身がわからなくなっ  
てしまっているところがありますよね。上原さんがおっしゃるように、1の(3)はどちらか  
かというと日本的な集団意識みたいな雰囲気があるのですが、1は「能力を最大限伸ば  
します」と非常に個人主義的になっています。ここは何かもう一つ違うテーマで行くべき  
ではないでしょうか。今おっしゃったように、やはり子どもたちに生きて次の世代をつく  
ってもらいたいというのが我々の一番大きな願いだから。

(上原委員)

特にこれからはアクティブラーニングということで、生徒たちが自分でいろいろな意見を発表して、その中で学習していくという方向性を出していこうとしているので、受け身だけのコミュニケーションでなく、発信するコミュニケーションも必要なのかなと。

(平塚委員)

今、知事が家庭との連携を言われていましたが、それは特にそうだと思うのです。最近あまり表に出てこなくなりましたが、虐待やネグレクトという言葉が以前かなり出ていましたね。

(山田知事)

今でも出ています。

(平塚委員)

この頃は他の問題がクローズアップされてきましたが、虐待やネグレクトについてはやはり家庭や地域と連携をしていかなければならないし、学校のほうも発信できます。担任の先生もできますし、ネグレクトなどは、学校の健診、内科や歯科の健診の中でも明らかにわかるのです。

(山田知事)

歯科が一番わかるしね。

(平塚委員)

歯科は見たらすぐわかるのですよ。全然処置していない。

親が全然、構っていない。無視している。そういう時はやはり養護の先生と連携して発信していくなど、救うような配慮はしているのですけれどもね。そういうネグレクトなどは、やはり家庭と地域と学校との連携をかなり強く持っていないとだめだなと感じますね。

(畑委員)

それと、家庭そのものがスポンジ能力みたいな柔軟さを失ってしまっていて、経済的な問題もありますが、経済的に豊かでも逆にプライドが強過ぎて、親と子のコミュニケーションがとれなかつたりします。昔みたいに2世代、3世代同居の環境には子どもを囲むスポンジ力みたいなものがもっとあったと思うのですが、そういうものが希薄になっている中で、子どもの居場所がなくなってしまうのかな。こういうところに書くには難しい話ですが。

(山田知事)

多分、いじめ、少年非行、不登校、ネグレクトなどが増えている背景には、本当に地域と学校がそれぞれ余裕をなくしている現状があるのでしょうか。その間の結び付きが弱い

から、おっしゃるように、今の社会には、クッションがない、逃げ場所がないという感じがしますよね。そういう逃げ場所づくりみたいなものがやはり必要で、それは多分2の(2)だと思います。

1で子どもたちにそういう場合の対応能力をある程度身につけてもらって、2で社会全体のクッションの力を増やしていく。3は「私学とともに学びの環境を整え、社会を生き抜く力を付ける教育を進めます」と、これまた社会を生き抜く力を付ける教育になってしまっているので、非常に違和感があります。だから、1では子どもたちに生き抜く力を付け、2は、それを支える社会をつくる。3は、そのためにやはり私たちは何をもっとしなければいけないのかというような話を入れていくほうが本当はいいのだと思いますね。4は、もう少しオプションな部分という構成ではないかと思います。この3の立て方は違和感がありますね。

問題なのは変化の激しい社会をたくましく生き抜く力とは、それができる教育とは何だということ所で、もう少し鋭いメッセージを出してもらえたら。これはやはり1、2のところだと思うのですけれどもね。子どもが生き抜く力を持ち、社会ももう少し弾力性を持って、クッションになる。これをオール京都でつくり上げるみたいな話がおそらく3に来るのではないかな。

(冷泉委員)

やはり、いじめも少年非行も不登校も、結局は家庭なのですよね。だから、本当は家庭のことをもっと書きたい。いっぱい書きたいけれども、ここに家庭のことを書くのが適切なかどうかかわからないですが、もし書いてもいいなら、ぜひ、もっと家庭や地域が、積極的にネグレクトや虐待に対する対応ができるような方向に持っていきたいですね。

(山田知事)

だから、事務局と教育委員会とが合同でつくることのできるのは、結局、知事部局の力を生かすことができるということです。私たちは青少年課や子育て政策課を持ってやっている。これもはっきり言えば教育なのです。教育委員会だけが教育をやっているわけではなくて、家庭教育や子育て支援の中でも教育があって、そういうところの連携をよくしていくことによって、家庭に対しても今まで以上に踏み込むことができるのではないかな。3には、オール京都みたいに、教育委員会だけの教育ではないのだという御提案をいただければ、我々もまたやっていけるのではないかと思います。

(畑委員)

3は、そういう意味でも、おおらかさみたいな部分も要るわけですね。

(冷泉委員)

おおらかというより、もう少し家庭がとにかく重要ということを。

(山田知事)

でも、聞いているとなかなか難しくて。高校は中学校の時にもっと教育してくれと言う

し、中学校は小学校でもっと教育してくれと言うし、小学校の時は幼稚園で、幼稚園は幼稚園に来るまでに教育してくれと言う。だんだん教育の過程が上へ上へと持っていかれる。親は学校で教育してくれるからと安心していて、結局ぐるぐる回っているだけみたいなことになっていますのでね。

(冷泉委員)

ただ、やはり家庭がSOSを発信した時に受けとめられる、ダイレクトな逃げ場はぜひ必要ですね。

(山田知事)

前はおじいちゃん、おばあちゃんがいたり、兄弟がいたりして、子どもたちは自然と力をつけたり相談することがあったのだけど、今やお父さんとお母さんと小さい子どもだけの家庭で、そのお父さんとお母さんが虐待の主体だったりすると、もうどこにも逃げ場がなくなってしまうのですよね。そこはもしかしたら学校がもう少し出なければならぬ面なのかもしれませんね。先生方もたいへんだとは思うのですけれどもね。

(安藤委員)

保護者の立場から言わせてもらおうと、保護者の労働のあり方が深く関わってきていると思います。共働きが非常に増えていて、長時間労働で、小さい頃から保育園に預けざるを得ない。だから、こうした大綱を作るに当たって、教育委員会と知事部局が手を組んだサポートが非常に大事なかなと思います。真面目なお母さんほどギュッと視野が狭くなり、行き場が見つけられずにそのまま虐待やネグレクトなどになってしまうという保護者も中にはいらっしゃると思うのです。親の責任だとか保護者が悪いのだというようなプレッシャーを与えずに見守ってくれる支援があればいいかなと私は思います。

(山田知事)

親も余裕がないのですよね。昔みたいに3世代だったらまだ余裕があるかもしれないけれども、もう日本否定みたいな話になっているわけですが。そのくらい親のほうも追い詰められてしまっているという現状があるのは事実だと思います。やはりそこに対しても我々がきちんとアプローチをしていかないと、何かみんながぎすぎすして、息が詰まっているような感じが確かにします。私たちはやはりオール京都でそれを支えていく体制をとりましょう。子どもの貧困対策などはまさに誰が悪いという話ではないですからね。

(冷泉委員)

全家庭との連携はどこかにしっかりと書いてほしいですね。

(山田知事)

地域、全ての連携ですね。

(森下文化スポーツ部長)

初めての知事部局と教育委員会のこの会議の中で、どうしても教育の本筋のところ少し特化し過ぎたと思います。御意見を伺いますと、やはりいろいろなところが力を合わせていかないと、子どもの育ちというのは難しいだろうと思っていますので、もう少し視野を広げた分を入れて、そこをもう少しメッセージを強く突っ込んで、オール京都の中で子どもが育つということ、それをどう推進の中に入れて頑張っていくかということで進めたいと思います。

(山田知事)

1は「子どもたちの生き抜く力」として、コミュニケーション能力もあるでしょうし、また、ライフデザインもあるでしょう。もちろん規範意識などもありますね。グローバルな中で生き抜くわけですから。2で、そのためにどういう環境をつくるか。子どもの貧困対策をはじめ、子どもを取り巻く環境に対する対応について。3番目にそれを「オール京都で、連携で成し遂げるんだ」と書いて、4番目にオプションなことを入れてください。

最初に言った、文化財とは何なのだということに対して事務局のほうから何かお話はありますか。

(森下文化スポーツ部長)

指定文化財だけが京都の文化ではなく、やはりその積み重ねた中でのヒエラルキーだと思っていますので、もう少し新たな視点で、もう少し広い視点で文化財を見て、これからの時代を見据えて文化財というものを把握する。ここはもっと書き込んでいきたいと思っています。

(山田知事)

ここは少し難しいところがありますよ。私どもの一番の問題意識として、文化財保護課はどうしても指定文化財を保護するという立場でやってこられたところだと思うのですね。それに対して、これからの文化教育は、指定文化財を大切にすることはもちろん大切だとは思いますが、それだけではないでしょう。日本の文化というものを身につけて、それをさらに高めていくような力があって、そのためには文化財というものについてもっと幅広い観点からいろいろと考えていかなければならない面があるのではないかなということが、言いたいのですけれど。

だから、文化財保護課と知事部局の文化関係部局とがもっと連携をする必要があり、観光振興はあとからついてくる話で、観光を最初に言うと逆に文化の価値が下がるような気がします。

お茶もやっていただいたわけで、お香も和歌もここにいらっしゃる。本当の文化財保護課とはそういうことを考えているところではないかなと思います。文化財保護課がほかの全体の教育としての文化をもう少し。

(畑委員)

そういうところで、4の(1)と(2)の2つがあるのですけれども、どうしても行政



の守備範囲的に分かれてしまっています。

さっき知事が御指摘になった、文化財という言葉の認識と定義について、一応ここでは「先人の技能と叡知、我が国の文化と歴史が結晶化された京都の文化財は」というふうに、定義されていますが、この辺はいかがですか。

(山田知事)

ですから、ここからどうして行くのかということですよ。 「調査・研究」「保護・活用」と言っているのですけれども、「調査・研究」「保護・活用」はどうなっているのかなど。活用は観光振興になっているのが気になります。

(畑委員)

これはまた子どもたちの教育や生涯学習などとも。

(山田知事)

せめてもう一步、何かちょっと格調の高さを示したいですね、ここは。まあ、文言の話はまた事務局案を出していただいて。

(畑委員)

日本文化を発信したいとか、何かをやりたいという。

(小田垣教育長)

この前、ジュールゲードの子どもらが京都に来て、鴨沂高校の生徒と交流しましたけれど、フランスの子どもは京都に来るに当たっていろいろ勉強してきていますね。京都とはどういう場所かと。その話を聞いて、鴨沂高校の生徒が逆に、自分たちがいかにすばらしいものに囲まれているかと気付かされているのです。そういう意味で、文化を子どもに考えさせる時に、我々がやっているいろんな教育活動の中で、自分たちの立っている場所を再発見させる、気づかせるというような活動もあっていいのかと。4月からそういう事業を新しく教育委員会で組み込んでいるのですが、やはり積極的にそれを外国の方にこちらから伝えていけるような工夫が要ると思います。

(山田知事)

そのあたりはやはり何か、もう少しインパクトのある表現が要るのかもしれませんが。せっかくいろいろと教育委員会は文化事業をやっているから、もっと行くぞ、もっとやるぞみたいな感じが出てもいいのかもしれない。

(冷泉委員)

畑委員がおっしゃっているように、文化財と文化とを切り離して考えているところが、ちょっとだめなのかもしれませんね。文化財というと、どうしても有形のものを考えてしまいがちですが、本当は無形のものもあるし、全てが文化財なわけですから、文化という言葉のほうがいいのかもしれないですね。

(山田知事)

ここで書く時はそんな感じがしますよね。

(畑委員)

さっき、知事がもっとメッセージ性を持たせたいとおっしゃいました。3ページを見ると、全項目、全部「進めます」で終わっていますね。どういうふうに書いたらいいですかね。前のページを見ると「育みます」が続いています。

(山田知事)

途中までは「育みます」で、途中から「進めます」になっています。

(畑委員)

最後のページだけを見ると最後は全部「進めます」。何か、いい言葉は。

(山田知事)

これで統一がとれているのですけどね。

(畑委員)

こういう言い方は行政的で、それでいいのかもしれないし。

(山田知事)

ちょっと何か寂しいですよ。

(畑委員)

子どもたちにもわかりやすくというのがやはり難しい。

(山田知事)

何か事務局のほうから、この「育みます」と「進めます」について。

(森下文化スポーツ部長)

初回の時に各委員から、やはり“子どもたちに対するメッセージ”が非常に大きなテーマとして上がり、一番はそれを出したいなと思いつつも、やはりこちら側としてはやれることを聞いて具体的にやっていかなければと。環境づくりもあり、また文化やスポーツなどの問題もあり、そこから付け加えていったので、ちょっと語尾の使い方が若干変わってしまっていると思います。そこはもう少し整理してわかりやすくして、かつ、上と下がニュアンスが変わっていますので、そこは事務局のほうで整理をさせていただきますので、よろしく願いいたします。

(冷泉委員)

確かに、「文化財の修理技能を有する事業者や後継者の育成、原料及び材料の確保」と、この辺だけがいやに細かいですね。

(山田知事)

これは自由懇談の中での話をここに引きずってしまったので、細かくなってしまったのだね。

(森下文化スポーツ部長)

あの議論を受けて、教育委員会と知事部局がということになりますと、やはり4番がターゲットとして出てきましたので。

(山田知事)

ターゲットはいいのだけど、ちょっと細かい。

(森下文化スポーツ部長)

もう少し大きな視点で。

(山田知事)

多分この前の議論に引きずられたのだと思います。あれは少し観点が違うのでね。ただ、大切なのは、やはり文化、文化財に対して教育委員会と知事部局で力を合わせてどういうアプローチをするかということだと思います。それによって本当に子どもたちがグローバルな時代に、日本人として、京都の人間として、どこに行っても堂々とやっていけるような文化力を持った人に育ってくれることがやはり一番大きな目標でしょうね。

(小田垣教育長)

何か普段の生活の中で、その文化に触れられるといいと思うのですけれども。実は25年の4月に京都府指定の無形文化財保持者で、瓢亭の主人、高橋英一さんを唯一、都道府県で指定しました。

(山田知事)

指定しましたね。

(小田垣教育長)

高橋さんには去年の暮れに高校生に、だしの指導をしていただいて、そのだしを使って高校生が地域のお年寄りにおせち料理をつくってくれたのです。積み重ねてきた文化をそういうふうに分たちが学んで体験する。それが多分京都の地の利であると思いますね。

(山田知事)

この前聞いた話では、「京都の水が一番おだしが取りやすい」と。まさに京都とはそう

いうところなのだよと。

(小田垣教育長)

実際、家でそれをやってみると、普段食べているインスタントの食品とは全然違う味がして。

(山田知事)

東京の水と沖縄の水と京都の水を持って行って、そこでお豆腐をつくらせると、同じ材料で、同じようにやっても、全然違うお豆腐ができるのです。そういう教育はできないですかね。東京の水でつくと木綿豆腐で、沖縄の水でつくとカチンコチンになるのです。京都の水でつくと絹ごしに近いようなお豆腐ができる。それだけやはり地域によって個性の違いがあるということを理解していくと、京都の持っている文化がわかるのではないですかね。

(小田垣教育長)

画一化とか均質化で、そういう個々の違いが非常に薄まっているところがあるので、そこに目を向けさせることも非常に。

(山田知事)

そうすると、この環境の話もわかるのではないかな。

(森下文化スポーツ部長)

事務局としては、立ち位置が少し違うものを組み合わせましたので、構成を若干整理して、子どもに対する幅広いメッセージを少しまたお聞きしながら事務局でまた整理をして行って、がんばっていきますので、よろしくお願いします。

今日の議題の1つは既に御意見をいただきました。

それと、せっかくの機会ということもありますし、また昨年来いろいろと問題になっている高校生等の大麻の関係で事案がございました。一昨日もそういう事案がありましたので、この状況等につきまして小田垣教育長から、現状の対応等につきまして御説明をお願いしたいと思います。

(3) その他(大麻対策について)

(小田垣教育長)

せっかくの機会ですので、この間、府議会でお話し申し上げた薬物乱用の根絶に向けた取組について報告させていただきます。

昨年9月に京都府内の高校生が大麻取締法違反で検挙されるという非常にショッキングな事態が発生し、その後、10月9日に府立高校の校長を集めて緊急校長会を開催。京都府警ともいろいろ調整する中で、10月19日に「薬物乱用の根絶に向けた取組の徹底について」という通知文を出させていただきました。

教育委員会は、9月の高校生の逮捕事案から、薬物の非常事態宣言をしていますので、それに基づく対応をこの間続けてきました。けれども、そういう取組をしている中で2月26日に、京都市内のコンビニエンスストアの駐車場に駐車している車の中で、高校生と中学生と19歳の少年の3名が大麻を所持していたことにより逮捕されたという事態が発生しています。

今回、特に我々が重視しているのは、中学生がその中にいたこと。更に、新聞報道によると大麻を売り買いしていたということです。要するに単に受け身でなく、もう一步踏み込んだ行為をしていた。まだ補導中ですので詳しい情報は聞けませんが。いずれにしても、現在、非常事態の宣言をする中で取組を続けておりますが、次年度に向けて、この年度内での一定の総括をするとともに、「薬物乱用の防止から根絶に」ということで、去年の秋から対応を進めていますけれども、より一層その徹底を図っていく必要があるというふうに考えています。

昨日付けで府立学校長宛てに再徹底の通知文を発出しました。市町教委の教育長さん宛てにも同様のものを出ささせていただき、市内では小学生の補導案件が出ていますので、高等学校に限らず、府内の全ての学校でそういう可能性があるのだということを踏まえた対応をしていきたいと思っています。引き続き緊張感を持って取り組みたいと思っています。

次年度の予算で、啓発用のさまざまな予算計上もしていただいていますので、より効果的な施策を取り入れたいというふうに考えています。

(森下文化スポーツ部長)

私学の関係を少し申し上げたいと思います。

私立中学校高等学校連合会では、この問題に昨年来から再度対応しようということで、当然、教育委員会とも連携しながら取組をしており、今回も十分情報共有しています。

併せて、やはり学校だけではなくて、地域や保護者の力が大事だということから、保護者連合会との具体的な取組、またその中でいろいろな研修会などでの取組、また薬物乱用防止教室がまだ全部の学校ではできていない状況がありますので、これも徹底しようということで要請をしています。私学側としても府警なり薬務課、また教育委員会と一緒にあって取り組んでいきたいと考えているということです。

(山田知事)

薬物が社会のいろいろなところに入ってしまったという現状は、野球選手の話も大きく報道されているので、子どもが影響を受けなければいいなと思います。それからやはり広がり始めると、日本はアメリカを何十年遅れで追っかけているところがありますよね。アメリカの学校における薬の問題は非常に深刻ではないですか。アメリカではどんな対応をとっているのか、またどこかでわかればいいなと思いますね。とにかく水際でくい止めていくことしかないのですね。

(冷泉委員)

新聞報道で知る分には中学生の子が薬物を売っていたのでしょう。その中学生に売った

のは多分大人ですよ。そこがやはり非常に問題ですね。

(山田知事)

昔であれば中学生が買うような話はないです。ましてや、中学生に売るような人はいないと思うのだけでも、それがこういう形になってくるといのはどうなんですかね。

(小田垣教育長)

拡大と低年齢化、要するにどこも例外はないという状況にあると思います。

(山田知事)

携帯を持っているから、バーチャルなので、年齢問わずでしょう。逆に子どもたちのほうが詳しくなったりしますから。

(上原委員)

だから、スマートフォンの弊害もこういうところに出てくる。スマートフォンという道具を使ってつながっていく。

(山田知事)

一部のところでスマートフォンに規制をかけているところがありますがけれども、京都府の教育委員会はスマートフォンについては何か対策をとられているのでしょうか。運動はしていますけどね。学校での規制みたいな話はあるのですか。

(小田垣委員)

基本的に高等学校については学校単位です。実情は学校ごとに違います。私が校長をしていたところは持ち込み禁止で、一切触れさせない。ただ、それができる学校とできない学校と、それぞれ事情がありますので、一定のルールを持つ中でそれぞれの形をとっています。

(山田知事)

そうなってくると、何かそのあたりの問題もあるのかもしれないですね。その地域の実情や子どもたちの状況に応じてという部分はまた考えなければならない点があるのかもしれないけれども、根本的な考え方はやはり教育委員会がまとめていく必要があるのではないですか。

(小田垣教育長)

校長会で携帯の規制についてどう踏み込むのかを検討しています。今年度に取り組んだことを踏まえて、次年度は、知事がおっしゃるような統一的な対応でいくのかどうか、それぞれの状況がありますので、そこは今少し詰めていきたいと思っています。

(山田知事)

大人の携帯にも怪しげな情報が沢山入ってきますからね。子どもたちの携帯にも同様の情報が当然入ってくるわけなので、迷惑メールの規制も含めて一定の対策は。例えば必ず学校でチェックをして、迷惑メールのフィルタリングが一番厳しい設定になっているかどうかを見るというような話はないのですか。

(小田垣教育長)

現状ではそれは家庭にお願いしているわけです。

(山田知事)

だから、それでいいのかということですね。少しそういう問題が出てき始めました。

(小田垣教育長)

SNSで外部の情報が流れているというのが一つありますので、そういう情報をどんなふうに遮断させるかというのが一つの在り方だと思っています。

(森下文化スポーツ部長)

では、ありがとうございました。本日の大きな議題である大綱については事務局で再度整理をして、今後の進め方につきましては改めて御連絡を申し上げたいと思っております。

また、最後の事案等につきましても、やはり知事部局と教育委員会と一体的な対応が必要だと思っておりますので、またこういう場を通じて委員の方から御意見をいただきたいと思っております。本日はどうもありがとうございました。